お，このグループは，現在までに収集して研究資料を中心に，検討を進めることで意見の一致をみている。

(1972. 11. 30)

注1　大学進学の現代的意図　就職指導　日本リクルートセンター，1972. 4

注2　困った場面における自己開放性についての一研究（蔭山氏と共同）青年心理学年報（仮称）金子書房　1972

注3　依田新編　青年心理学　光生館　6I72. 11

注4　依田新ほか編　現代青年の社会参加　金子書房　1972. 11

一年間の研究経過報告と今後の課題　植　村　勝　彦

1. 一昨年来の共同研究である「過疎地域」問題は今年度も継続して行なわれ，次の如き成果と研究を続行中である。

イ　昭和46年度科学研究費総合研究(A)〔研究代表者続有恒教授〕による調査に関して，熊本県水上村，長野県上村（2度目）の面接調査結果は，これまでのものと同様，夫々テープを飜文し，「名古屋大学教育学部教育心理学科研究資料」No.5及びNo.6として公刊した。また，過疎地域からの離村者に対する面接調査については，われわれ名古屋地区グループの受持ちである長野県上村，岐阜県坂内村からの愛知県下への転出者について，夫々40名のケースの面接を完了したが，データ収集が多少遅れている他地区グループもあり，目下のところ，集まったデータの整理を進めている状況で，分析の段階には至っていない。しかし，近日中に全地区のデータが揃う手筈になっており，分析作業に入る予定である。

ロ　長野県上村(1)，山形県大蔵村，島根県頓原町の「研究資料」のデータを基にした分析結果は「いわゆる過疎地域の問題(5)」として，地域共同体意識の変容のありさまを，公的共同活動の場合を例にとって，1972年度日本教育心理学会総会において発表した。また，その他の地域の資料集のデータを加えての，より綿密な分析は本紀要に報告されている。この研究に関する，今後の差当っての課題は，農事共同，近所付合など，私的共同活動における意識の変容の過程，また，その背景要因の構造を明らかにすることにある。

ハ　「研究資料」を用いての，いわば「質」的データの分析と平行して，上記の視点と同種の分析を質問紙調査によって「量」的に把握する試みに着手した。そして，その一端を1972年度日本社会心理学会大会において「地域社会の変貌にともなう生活意識の変容—愛知県下の一過疎町村を例として—」と題して報告した。未だ十分練れたものとなりえていないが，「質」と「量」との相互補完による，過疎地域社会の住民意識の変化についての理解を促進させる手掛りとして意図したものである。

ニ　過疎研究グループの今ひとつの問題意識としての方法論的討究—自由な面接を通して得られた情報から，どれ程の真実を導き出し得るか—は，理論的支柱としての続教授を喪った現在，以前に倍して困難な事態となったが，教授がわれわれに残していかれた課題として，時間をかけても自分なりの方法を考究していきたいと考えている。

2. 過疎地域に限らず，地域社会集団の心理学的研究を志向してみたいことを昨年の本欄に述べたが，そのアプローチの第一歩を地域共同体意識の変容に求めたことは，community psychology がややもすると community Mental Health の研究に限定されてしまいがちな傾向への批判を込めたものである。目下，過疎地域を含めて，地域社会構造の形態を異にする地域（過密，過疎，団地など）における共同体意識の変容の認知を，その共通性（時代要因）と特殊性（地域構造要因）に焦点をおいて明らかにすることを試み，その一部は県下の町村を対象に，小規模ながら調査を実施中である。この問題は，更に，地域社会住民の現実の連帯度（Community Solidarity）の測定の問題へと波及していくが，これらを含めた本格的な取組みは来年度以降の計画として予定している。

最後に，私にとって，名古屋大学における研究および教育上の指導者であり，また，過疎研究グループの名実ともにリーダーであり，理論的支柱であられた，故続有恒教授のご生前のご指導に改めて深く感謝の意を表するとともに，衷心よりご冥福をお祈り申し上げるものである。

(1972年11月30日)